

平成25年度第5回 函館市観光基本計画策定検討委員会 会議録

■ 開催概要

開催日時：平成25年11月12日（火） 10：30～12：00

開催場所：函館市企業局4階 会議室

出席委員：木村委員，蝦名委員，遠藤委員，奥平委員，折谷委員，小林委員，田中委員，
中野委員，西村委員，藤森委員

欠席委員：和泉委員，市根井委員，國分委員，黒川委員，全委員

函館市：観光コンベンション部長，観光コンベンション部次長

■ 次第

- 1 開 会
- 2 討 議
- 3 委員長総括
- 4 そ の 他
- 5 閉 会

■ 討 議

（木村委員長）

早速，議事に入る。

事前に素案を配布しているが，まだ素案の段階であり，これから是正していかなくてはならない。特に大本の部分については，しっかりと議論していきたい。

前回までの確認であるが，基本理念については，「ひと・まち・文化の宝石箱 新・国際観光都市 函館へ」とした。

基本方針については，「交流・にぎわいの創出」，「おもてなし・満足度の向上」，「国際化の促進」という3つの柱とした。

基本方針を読み解くためのキーワードとして5つを挙げているが，前回の議論の中で，もう少し表現に整理が必要だとの意見があったことから，私と事務局とで整理し，「函館ブランド」，「プロモーション」，「ホスピタリティ」，「もう一泊したいまち」，「MICE」とした。

「プロモーション」，「ホスピタリティ」，「MICE」については，やや一般的な言葉ではないが，函館の主要産業として観光を考えていくにあたり，今後，全市的に広く浸透させたい言葉であることから，十分に解説を加えた上で，5つのキーワードの中に挙げさせていただいた。

目標設定だが，基本方針の達成度を測る指標ということで，「平均宿泊数の増加」，「函館の印象「とてもよい」の回答率向上」，「来函外国人宿泊者数の増加」を挙げている。

今回お示した素案は、昨年度の現状分析等に関する基礎調査の結果を踏まえながら、それらの内容を計画の中核に据えて作成した。中には、市としての考えが反映されている部分もあるので、まずは、事務局から全体について説明をいただきたい。その後、討議ということにさせていただく。

(事務局)

(資料に沿って説明)

(木村委員長)

まず、欠席委員から意見連絡票をいただいているが、黒川委員からは、W i - F i の推進について、フリースポットの拡大は目指せないのか、という意見をいただいている。これは商品名のことか。

(事務局)

黒川委員の意図は、無料のW i - F i スポットの拡充ということだと思う。

(木村委員長)

各委員からも意見を頂戴したい。

まず、私から口火を切らせてもらうが、計画期間の最終年度である平成35年度に入込客数550万人の達成を目指すという記載があるが、この委員会では、新幹線の開業をピークに、その後、数字は下がっていくだろうという認識であったので、ここについては、各委員にとってもやや違和感のあるところだと思う。

ただ、先ほど示された市の考えによると、実現できる可能性は十分にあると感じた。観光アドバイザー会議でも、現計画の入込客数の目標値である650万人については、下方修正する必要があるという意見も出ていたことから、550万人という数値を目標に掲げることは、私としてはいいのではないかと考えている。このあたりから、まず各委員の意見を頂戴したい。

(中野委員)

前向きな議論として、緩やかに上昇を目指すというのは、いいと思う。ただ、グラフを見ると、北陸新幹線開業の年に、入込客数が落ちているのが気になる。それであれば、そこも色々な対策を打って、下げないように努力すべき。

(奥平委員)

私自身も、雑ばくな計算ではあるが、新幹線開業で100万人くらい増えてもおかしくはないと試算しており、開業時に530万人というのは、それなりに意味がある数字

だと思う。ただ、最終年度の前に600万人くらいまで到達してしまった場合、その後をどうするか。

(田中委員)

550万人と見込んだ根拠を知りたい。この数字は妥当であるとは思いますが、説明が必要。また、入込客数は、災害や経済危機などの外部要因に大きく左右されるので、外部条件によって目標値は変更されるという一文を加えるべき。

(木村委員長)

入込客数の目標設定について、事務局の考えをお聞きしたい。

(事務局)

新幹線の輸送人員は、一日あたり約1万2千人となり、現状の倍以上となることから、かなりの入込客数の増加が見込まれる。

しかし、必ずしも満員で来るとは限らず、また減少する要素も想定される。例えば、新幹線開業の翌年やオリンピック開催の年は減少するだろうが、目標を設定し、その達成に向けて様々な施策を展開することで、少しでも多くの観光客に来ていただけるような取り組みを進めていきたいと考えている。

一方で、本計画は5年後に見直しをすることとなるので、開業後、どのように函館の観光が変化していくのか、今後の観光アドバイザー会議において、議論していただくことになる。

(木村委員長)

入込客数については、北陸新幹線開業時や北海道新幹線開業後など、観光アドバイザー会議での議論のポイントになると思うので、大胆な上方修正、もしくは外部要因による変化を視野に入れながら、数値を観測し続けていく必要がある。そうした理由から、入込客数の目標値については、次期計画にも掲げることとしたい。

なお、外部要因や北陸新幹線開業時の影響については、いろいろ計算していると思うが、私と事務局とで、もう少し精査させていただきたい。

次に、経済波及効果についてはどうか。

(田中委員)

観光消費額に対する生産波及効果の倍率について、現計画で1.41倍だったものが、今回の結果では1.49倍となっていることから、函館市における観光の経済波及効果が、これまでよりも大きくなったということだと思うが、他産業と比べて観光の特徴が出ているのか、もしくは伸びしろはないのか。

(事務局)

他産業との比較については、この場では分からない。

(田中委員)

希望としては、他産業を含め、ヒストグラムの様に、一目で分かるようなものがあればよい。

(中野委員)

依存率というか、地域の経済全体の中で、函館がこんなに観光に依存している、ということが分かるようなものだと理解しやすい。

(木村委員長)

ポイントは他産業との比較ができること、特に、函館市においては、観光業による経済波及効果が大きいということが分かるようにすべき、という指摘だと思う。

(事務局)

生産波及効果倍率について、今回は、道南における各種データを基礎として算出したものであったが、今回は、初めて函館に絞って算出したものであり、より精度が上がったということが言えるので、それが分かるような説明を記載したい。

(田中委員)

全国では約2倍とあるが、それに比べると、函館はまだ効果が低いということなのか。

(事務局)

地域が小さくなればなるほど、他の地域から調達しなければならない財・サービスが増えることから、地域への経済波及効果は小さくなる。その点、函館は北海道よりも高い数値を示しており、むしろ観光に限っては効果の高い地域であるということが言える。

(奥平委員)

比較にあたり、他都市の生産波及効果倍率を追加するということだが、道内の都市だけか。

(事務局)

道外も含め、観光地などを追加したいと考えている。

(西村委員)

観光入込客数だけではなく、宿泊客数も目標値として持つべきではないか。経済効果を考えるならば、効果の高い宿泊客数についても論じるべき。

(事務局)

平均宿泊数の増加という目標を設けていることから、そうした視点は持っていると考ええる。

(西村委員)

それであれば、宿泊数ではなく、宿泊客数といった実数の方が分かりやすいのではないか。入込客数には、経済効果のない、素通りする人数もカウントされていることから、より効果の高い宿泊客数を目標に入れるべきではないか。

(事務局)

そうした議論はこれまでなかったもので、木村委員長と協議していきたい。

(木村委員長)

西村委員のご意見は、実は事務局との協議の中では出てきていたので、どのような形で表現できるのか、改めて考えさせていただきたい。

今は、入込客数は半年に一度公表しているが、スペインでは2週間に一度であり、状況に応じた素早い対応を実施していると聞く。今後も、観光アドバイザー会議において、観光に関わる情報をどんどん共有していきたいと考えている。

(小林委員)

函館観光にとって、滞在日数の増加やリピーターの増加は、重要な取り組みの一つ。

また、素案の中で、地域ブランド力に関する民間評価の結果が掲載されているが、函館が、今後どこをライバルとしていくのか、一位になるためにはどのようなことをしていかなければならないのかを考えることが重要。

(事務局)

ブランド力に関する評価についてだが、高い評価をいただいていることはありがたいが、良い順位であることが、必ずしも入込客数の増加に直結するとは限らない。高い評価に見合った、観光客に満足していただけるような観光地を目指さなければならないと考えている。

(蝦名委員)

入込客数に関する目標値の設定については、最初は違和感を持ったが、今後の活動につなげていくためには、分析のための具体的な数値も必要だと感じた。実際には、観光客と直に接するような人達には、おもてなしの向上など、質的な良さを高めていくことを目標にすべきだと思う。

(遠藤委員)

素案については、全体的に良く仕上がっていると思う。

最近、再び聞くようになったのが、新世界三大夜景に函館が選ばれず、函館が転落したということ。落選したという悪いイメージを持たれている。実際は悪くなって転落したということではなく、長崎の発信の仕方にインパクトがあり、上手だったということなのだが、函館もイメージをうまく伝えられるような発信を継続していかなければならない。

(折谷委員)

函館は、観光に関するイベントや勉強会が多いが、これらに全く興味のない市民も多い。観光が基幹産業であり、多くの方が関わっているということを浸透させるためにも、先ほどの議論にあったように、経済波及効果の部分においては、分かりやすい説明が必要だと思う。

また、来函観光客を年代別に見ると、50台以上が半数を占めていることから、ターゲットを絞った新しい観光メニューを考えていくことができると思う。

■ 委員長総括

(木村委員長)

もう少し細かく見ていきかけたが、まだ制作過程であり、事務局とともに修正作業は続けていくので、意見があれば事務局にお寄せいただきたい。

また、これからパブリックコメントの募集もあり、様々な意見が寄せられると思うが、基本的には、私に一任いただきたい。

■ 閉 会